

令和 8 年 2 月 27 日

うきは市議会議長 江藤 芳光 様

厚生文教常任委員会
委員長 高木 亜希子

委員会調査報告書

令和 7 年うきは市議会 12 月定例会において閉会中調査を申し出て、所管事務調査を行ったため、うきは市議会会議規則第 110 条の規定により、下記のとおり報告する。

記

浮羽究真館高校活性化支援策に関する事務調査

1. 調査期日:令和 8 年 2 月 6 日
2. 調査場所:うきは市役所 3 階委員会室
3. 出席者:厚生文教常任委員 7 名・議会事務局 1 名
4. 調査目的:

本委員会では「浮羽究真館高校活性化支援策」に関して調査を行ってきた。実際に生徒たちのニーズを把握すべく全学年を対象としたアンケートを実施の上、1 月 29 日に浮羽究真館高校の生徒たちとの意見交換会を行った。これらを踏まえ、高校活性化支援策に関して事務調査を行い、各委員の意見を集約することを目的とした。

5. 調査要旨:

まず、実際の在学生アンケートの結果について要点を報告する。

1 年生 107 名、2 年生 93 名、3 年生 22 名、合計 222 名から回答を得た(在籍者数は令和 7 年 5 月時点で 337 名/3 年生は受験期間に該当)。

『進路選択時、浮羽究真館高校を選択した理由は』の問いに対する上位回答は①コース(18%)②通学距離(14%)③部活動(11%)であった。次いで偏差値、友人・先輩からの口コミとなっている。

『市が支援を行う場合、どのような支援をしたらもっと魅力的な学校になると思うか』の問いに対する上位回答は①食堂・売店に関するもの②交通手段の改善③学校イベントへの補助であった。次いでグラウンドの整備、学校設備への補助となっている。

このアンケート結果をもとに、1・2 年生希望者 17 名と議員が 3 班に分かれて意見交換を行った。その際に意見として挙げられた主な意見については、以下のとおりである。

進路に選んだ理由

コース制になっている(他校と違い、2 年生から選べる)。高校受験の時ではまだ将来の目標がわからないが、2 年生から理数・人文・情報マネジメント・生活環境を選べるコース制なので、就職も大学進学も考えられる。兄や姉からの勧め。家から近い。

入学後の実感

勉強やイベント、学校の雰囲気が良い。部活動が盛ん。2 年生で選択できるコース制はやはり良い。

市外から通学しているが公共交通が不便で親が車で送迎している。活用しやすい交通手段があると良い。入る時は知らなかったが、指定校推薦が多い。

市が支援するならばどのような支援を望むのか

- ・学食の復活。給食タイプではなく、選べるタイプが良い。
- ・交通手段を改善・充実してほしい

市外から通学しており遠い。親の車で送迎など。交通手段を増やしてほしい。
筑後吉井駅～浮羽究真館高校は距離がある。バスを1本乗り過ぎると遅刻する。別の手段か、バスの増便をしてほしい。
バイク通学可の距離をもっと短くしてほしい(現在は7キロから)

- ・のーとうきはを活用できないか(前後の1時間ずつ・特別運賃・朝倉方面からの便)など。
- ・各種イベントの宣伝をしてほしい(文化祭や体育祭など)。小中学生にもっと知ってほしい。
- ・通学路にあたる道の自転車道路整備をしてほしい。
- ・模試代 3800 円×3 回分や受験用の参考書代、通学費を補助してほしい。

アンケート及び意見交換会を踏まえ、2月6日に厚生文教常任委員の閉会中調査で意見の集約を行った。企画政策課所管の通学費補助制度のチラシ掲載内容も確認した上で、委員からの主だった意見については以下のとおりである。

○私立高校の授業料無償化拡大で、公立高校受験生は減少するだろう。「浮羽究真館高校活性化の支援」という提案は、「自治体に1つも高校が無くなったら、市が衰退する」という危機感から生じたものだ(志望者数:令和7年度データとの比較は参考①を参照)。

○「浮羽究真館高校が、中学生が進路選択を考える際の選択肢の1つとなるためには、どのような支援が本当に求められるのか、そしてそれが市の予算を充当するに相応しいか否か」という観点から考えなければならない。そして市として事業を打ち立てるならば、今後継続していけるものでなければならない。

○市から提案されている通学費補助は「高校生のいる子育て世帯への経済的支援策」の一環だと考える。浮羽究真館高校通学生へ通学費補助を行うならば、平等性・公平性の観点から、市外へ通学している高校生のいる子育て世帯に対しても通学費補助を考えるべきである。

○「浮羽究真館高校支援策」と「高校生のいる子育て世帯への経済的支援策」のすみ分けを明確にすれば、市民の方の理解も広まるのではないかと。事業として、きちんと分けて提案するべきだ。

○チラシに掲載している内容(通学費補助・卒業応援金)は、「受験時の進路選択の動機」として疑問がある。経済的なところは保護者が見る。子どもたち自身は、そこは見えていないのではないかと。進路の選択は子どもたちが行うのであって、それには高校自体が楽しい場所・有意義な場所になることが大切ではないかと。

○学食の有無は他の公立高校との差となっている。寮があること、ラグビー部・野球部など各運動部が盛んなこと、保護者ニーズなどを考えると、やはり学食は必要であるとする。また、在校生ニーズが最も高い。復活できるように何らかの支援を行うべきである。

○「浮羽究真館高校での学生生活充実に対する支援」として考えるならば、「のるーと」の活用を図り、筑後吉井駅～浮羽究真館高校のピストン運行や、朝倉方面の乗車ポイントを限定した運行、前後 1 時間を高校生限定で運行、高校生向け特別運賃を設定する等が良い。

○卒業時よりもやはり入学時の支援が良いのではないかと。「入学時の自転車や原付バイク購入費に対する補助」「入学時に必要な制服や備品等の購入補助」等が適切だと考える。浮羽究真館高校に進学する割合(参考②)を上げていきたいならば、そういった手段が有効ではないだろうか。

○令和10年度から計画されている卒業応援金相当額を、浮羽究真館高校での学生生活を充実させる事業に充てるべきだ。もしも卒業時ならば、「市内事業所就職者のみ」など限定しなければ、多くの市民が納得できないのではないかと考える。

6. 所見

秋に行った保護者との意見交換会や先進自治体視察に引き続き、浮羽究真館高校在校生へのアンケート、それに基づく意見交換会実施と段階を経て、再び、浮羽究真館高校活性化支援策について閉会中事務調査を行った。12月議会でも報告したが、本市の場合は隣接自治体に多くの高校があるため、子どもたちは当然であるが多様な選択肢の中から自らの学力・希望する進路に見合う高校、そして希望する部活動のある高校などを志望し、受験に臨んでいる。浮羽究真館高校生徒へのアンケート、1・2年生との意見交換会でのヒアリングではそれに加えて「中3年時点では将来への目標などが明確ではないため、高2になってからコース選択できる普通科として志望した」という考えや、あるいは既に入学している兄・姉からの勧めがきっかけとなったケースが多く、経済的な面を志望理由にしているケースは非常に少なかった。

従って、数多くの高校の中で浮羽究真館高校が今後「選ばれる学校」になっていくために市として支援するならば、「高校としての魅力向上に直結する事業」「生徒ニーズを満たす事業」の方が、やはり必要とされるのではないかと考える。

「私立高校無償化拡大で公立高校受験者減少が見込まれる令和8年度受験において、浮羽究真館高校を進路選択の候補とする受験生を増やしたい」という考えに基づき、年度途中である9月議会でチラシ印刷費を計上し、確定していない通学費補助の情報を早期に発信したことについては、一定理解したものの、本来、所管課が生徒に対しアンケートを実施するなど丁寧な手順を踏むことで実際の志望理由、そして市に対する生徒ニーズ・保護者ニーズは掴めたものと思われる。その手順を省いて提案されてきたことは残念である。

参考資料①に示しているが、2月の志願者数で確認を行ったところ、参考②に示した通り、浮羽究真館高校の志願者は大幅に減少しており、本委員会としては「チラシを活用した通学費補助の打ち出しが志願者確保に寄与したとは言えないのではないかと捉えている。私立無償化の波があったことは当然であるが、第7学区の他の普通科の志願倍率が8割台に踏みとどまっている中で、特に浮羽究真館高校に関しては特色化選抜志望者が大幅に減少している。交通の不便さや学食の廃止も、子どもたちの判断の一因となつたであろうと認識している。やはり学校そのものの魅力を向上させることが重要なのであろう。

また、浮羽究真館高校活性化に向けて市の予算を執行するために市民の理解を得るには、浮羽究真館高校と地域との連携が深まることや、参考資料②に示すとおり、ここ数年ではおよそ17%にとどまる市内両中学校からの進学者を増やすことが望まれると考える。将来の「うきは市の担い手」としての回帰性を高め

るためにも、地域との連携・市民の理解は大前提となるのではないか。

以上を踏まえ、委員会として

【1】通学費補助は「高校生のいる子育て世帯への経済的支援策」である。平等性・公平性を考えると、令和 8 年度当初予算で提案される「浮羽究真館高校生支援通学費等補助金」は市内通学生徒に対するものだという位置づけとし、市外通学生徒へも行うべきと考える。また、効果検証を行う「実証事業」的な位置づけとし、補助割合や持続的な事業実施を行うか否かについては、改めて検証すべきである。

【2】企画政策課が発行したチラシにすでに掲載されているため触れるが、「卒業応援金」は高校活性化支援策としては適さないのではないか。相当額で、浮羽究真館高校での学校生活充実のための事業を実施することを求めたい。アンケート・意見交換会の生徒意見でも出ている「学食の復活」・「のるーとの活用」・「交通手段の購入補助」などが適切であると考えられる。

- 学食については、令和 7 年 2 月定例県議会における教育委員会答弁(参考③)もあり、県としても「子どもたちが学生生活を送る上での利便性の観点から大切な施設」と位置付けているものである。営業時間の延長、地域住民への開放、自販機設置での収入増加など、様々な取組を検討することも可能となっている。それに加えてに市による人件費支援などを行い、学食で安価な食を担保することは、保護者負担軽減、生徒・保護者の安心感確保にもつながる。支援について積極的に検討すべきである。
- のるーとの活用については、地域公共交通計画の中で課題として上げられた公共交通の「運行本数が少ない」「利用したい時間に便がない」「利便性が悪い」といったマイナス面を補う意味でも、積極的な取組を望みたい。
- 交通手段(自転車・原付バイク)の購入補助については、令和6年11月に浮羽究真館高校生徒に対し実施しているアンケート(地域公共交通計画分)で手段として自転車が 62.4%、自動二輪・原付バイクが 11.4%であったことから、相当数の生徒に対してニーズが見込めると考える。

【3】浮羽究真館高校活性化支援のための協議体づくりについて、12月議会の際には「同窓会等の民間団体が主力となることが望ましい」というような説明であった。やはり立地自治体として明確に関与していくべきではないだろうか。市がその一翼を担うことを引き続き求めたい。

浮羽究真館高校は県立高校であるため、学校や県が魅力化に対して主体的に取り組むことが大前提ではある。しかしながら、市も市議会も「支援するべき」という方向性は一緒のため、本当に必要とされる支援策を今後も共に考えていきたい。

参考①浮羽究真館総合コース定員 160 名（県教育委員会発表データより抜粋し作成）の入試実施状況

年度	募集全体	特色化選抜 (上限)	推薦	特色化 内定	推薦内定	一般 志願者	志願者数	倍率
R7	160	100	15	78	9	23	110	0.69
R8	160	100	15	60	11	26	96	0.60
差				▲18	2	3	▲14	

→令和7年度の志願者総数よりも現段階で14名減少（2次募集が未）

※第7学区・普通科の倍率。下落しているものの、8割台に踏みとどまる。

特色化：調査書及び面接等の結果を基に選考。学校長推薦なしでも志願可能。特色化選抜で内定とならない場合、一般入試可能。

高校名	R7 倍率	R8 倍率
朝倉	1.06	0.98
朝倉東	1.15	0.83
朝倉光陽	0.83	0.80

参考②令和4年度～令和6年度の市内両中学校の卒業生進路について（学校教育課より回答）

進学先	R4	R5	R6	3カ年合計人数	3カ年の割合
浮羽究真館	39	57	33	129	17%
久留米・朝倉地域	117	148	141	406	53%
その他県内	28	23	18	69	9%
日田地域	44	25	40	109	14%
その他県外	12	14	12	38	5%
通信	4	3	1	8	1%
その他	0	2	1	3	
合計	244	272	246	762	
浮羽究真館高校の割合	16%	21%	13%		

※小数点以下四捨五入

参考③【令和7年2月定例県議会における教育委員会答弁要旨より一部抜粋】

質問：食堂事業者に対する運営支援と今後の対応について

◇

答弁：学校の中にある食堂は、子どもたちが学生生活を送る上での利便性の観点から大切な施設。事業者の撤退を食い止めるためには食堂利用率を上げていく必要があることから、魅力あるメニューづくりのため、生徒や教職員の声を事業者に伝えたり、食堂の利用を促すPRを生徒に行っていく。メニューの価格設定の相談や、営業時間の延長、地域住民への開放など事業者からの創意工夫ある提案に対して丁寧に応じるよう、各学校に対して働きかけていく。併せて事業者の収入増加につながる自動販売機の設置について、事業者から要望があった場合は、その要望に沿えるよう取り組んでいく。